エッセー

全カリ言語改革の日々－その光と影－

全学共通カリキュラム運営センタードイツ語教育研究室室員／
異文化コミュニケーション学部教授　新野 守広

本年 3 月に定年を迎え、4 月から特別専任教授になります。 2001 年 10 月に立教大学に着任して以来、ドイツ語教育研究室の室員を続けてきましたが、規定により、4 月以降は室員を離れます。これを機に、22 年半にわたる全カリとの関わりや思いをエッセー風に書くようにと全カリ運営センターから依頼されました。

改革を繰り返してきた全カリですので、何年にどのような改革をしたのかを記述するだけで、相当な分量になります。紙幅の関係もありますので、全カリの歴史を知りたい方は、『立教大学＜全カリ＞のすべて－リベラル・アーツの再構築』（全カリの記録編集委員会、2001 年）、および「大学教育研究フォーラム」に掲載されているさまざまな記事を参考にされると良いでしょう。ここでは、大学という職場における働き方という観点に絞って、率直な感想を記したいと思います。

2001 年に着任したとき、すでに全カリはスタートしていました。右も左もわからなかったので、上述の『立教大学＜全カリ＞のすべて－リベラル・アーツの再構築』を必死に読んだことが思い出されます。1991 年 7 月に大学設置基準大綱化が行われ、全国の大学では教養学部や教養課程の縮小や解体が進みましたが、立教大学では、キリスト教に基づき 1 年次生と 2 年次生のリベラル・アーツ教育を担ってきた一般教育部を廃止するのではなく、再編して新しい形で運営する方針を定め、1994 年に全学共通カリキュラム運営センターを立ち上げました。1997 年には、各学部に分属した旧一般教育部の教員と、学部から選出された教員とが共同で運営に参加する全学共通カリキュラムが始まりました。こうして全カリが走り出した只中、私は社会学部に所属する全カリ言語担当教員として着任しました。

社会学部では負担の少ない委員会を割り振っていただくなど、全カリ言語担当教員にさまざまな配慮をしていただきました。今でも感謝の念に堪えません。一方、新任教員の立場から見た全カリ言語の組織は複雑でした。各学部に分属する言語担当教員たちが室員として所属する英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、日本語の各言語研究室があり（そこには分属教員以外の教員も室員としてメンバーに入っていました。朝鮮語研究室はまだありませんでした）、各言語教育研究室主任と各学部から選出された運営委員とで構成される言語構想小委員会があり、さらに、言語と総合の両構想小員会をたばねる運営委員会がありました。着任 2 年目から私はドイツ語の主任になりましたが、授業の他に統一テスト作成や、教科書改訂、FD、時間割編成、学生対応、嘱託講師（現教育講師）のチーム作業の見守り、研究室室会の開催、人事などのさまざま

な研究室業務を行いながら、全カリの会議をこなしました。比喩的に言えば、二階建て、あるいは三階建ての会議層をぐるぐる駆けまわるような感覚で、目が回るような忙しさでした。

教室で学生に言語を教えることは喜びであり、言語を通して冷戦終焉後のドイツと変貌するヨーロッパの現状を生きた知識として学生と共有できる時間を持てることは、教員冥利に尽きました。しかし教育組織の運営は負担が大きく、さまざまなトラブルにも見舞われるうちに、いつしか教えることは従になり、組織運営が主となるという逆さまの状態が常態になり、大学教員にふさわしい毎日を送っているのだろうかと自問自答する日々を迎えました。全カリという一大プロジェクトに途中から参加した私は、こうした複雑な組織を構想し立ち上げた志ある教員たちへの共感がなかったら、困難な日々を乗り切ることは難しかったかもしれません。

実際、全カリの立ち上げにかかわった教員たちの情熱には頭の下がる思いでした。しかし、改革にまつわる過大な負担は無視できません。学内のいろいろなところから悲鳴に似た声が聞こえてきました。言語研究室相互のコミュニケーションが皆無だった点も気がかりでした。各言語研究室は多忙のあまり蛸壺状態にあり、研究室の垣根を越えて教員同士が率直に意見を交換する場はありませんでした。こうした複雑な組織の運営を支える事務局の苦労にいたっては、並大抵なものではありませんでした。

2000 年代初頭の改革への情熱は、大学の国際化へとつながりました。2008 年 4 月には言語担当教員の分属は解消されて異文化コミュニケーション学部ができ、2020 年 4 月には外国語教育研究センター（Center for Foreign Language Education and Research：略称 FLER）が開設されました。さまざまな文化圏を背景に持つ学生たちが行き交う現在のキャンパスの光景は 22 年前には考えられなかったことです。なんと喜ばしいことでしょう。ただ、さまざまな局面で人間関係の軋みに直面した私は、改革が生んだ影の部分を思い、複雑な気持ちになります。

着任当時、池袋キャンパスには白い木造の住宅が数棟建っていました。私の研究室は、かつて女子寮として使われていたミッチェル館（現在建て直し工事中）内にあり、一つの部屋を同僚の教員と共同で使いました。以後、キャンパスは見違えるほど新しくなり、研究室は 6 号館を経てマキムホールに移りました。2024 年 4 月から新しい言語カリキュラムがスタートします。FLER の皆さんの情熱が実を結ぶことを祈るとともに、教職員の健全な労働環境が確保されることを切に願っています。

にいの　もりひろ